

学 位 論 文 要 旨

氏 名 高橋 彩

題 目

自閉スペクトラム症を対象としたビデオ教材を利用した教育的介入方略に関する研究
—ビデオヒーローモデリングの適用可能性と適用条件の検討—

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

自閉スペクトラム症（以下、ASD）児に対する指導方略として、ビデオモデリングを用いた実践が報告されている。ビデオモデリングとは、子どもに獲得してほしい、望ましい行動を示すモデルを録画したビデオを用意し、行動の生起が期待される直前に子どもにビデオを呈示するという方略である。本学位論文ではまず、先行研究を分析することで従来のビデオモデリングの持つ限界について指摘した。そして、それを克服する手段の1つとして、ASD児の特性の1つである「特定の対象への強い興味」を活用したビデオヒーローモデリング（Video Hero Modeling; VHM）（Ohtake, 2015）の適用可能性と適用条件について実践研究を通して検討した。

第1章では、ビデオモデリングは、（1）スクリーンという限られた範囲での呈示をするため注意を向けやすい、（2）視覚刺激という ASD 児が強みを示す媒体を使用している、（3）面と向かってのコミュニケーションを必要としないため、対人コミュニケーションに抵抗がある ASD 児の場合、負荷が少ない、という理由により ASD と親和性が高いとされ、様々な行動の改善に活用されていることを指摘した。しかし、残された課題として、ビデオモデリング単体では効果が十分に得られなかった事例も存在することに触れ、どのような条件を揃えれば効果が期待できるかについて更なる検討をしていくことの必要性を指摘した。

第2章では1章で述べた課題を踏まえ、ASD 児を対象としたビデオモデリングによる実践に関する研究報告を収集し、先行研究分析を行うことによって、どのような条件下で介入効果に限界があるのかを検討した。その結果、ビデオへの注視能力、ビデオで視聴したモデルを記憶に保持する能力など、ビデオモデリングで効果が得られるための前提スキルが存在する可能性が示唆された。その一方で、前提スキルが揃えば必ずしもビデオモデリングの効果を得られる訳ではなく、児童生徒が標的行動を起こすための動機づけが必要になる可能性が示唆された。

第3章では、ASD 児の模倣障害の特性についての先行研究を概観し、その知見から効果的なビデオモデリングを考えるための枠組みを提起することを試みた。先行研究分析の結果、ASD 児では最終状態が明確な行動の模倣は温存されている一方で、モデルの行動過程を忠実に再現することが求められる模倣が少ないことが示唆された。このことから、ビデオモデリングを用いた介入においても、行動の結果事象が明らかでない標的行動の場合、行動変容が限定的になる可能性を指摘した。そのような場合の方略として、強化随伴性の併用やブロン

プト、課題分析などの手立てに加え、対象児が強く興味を示すキャラクターや人物をモデルとして採用する、VHMの適用可能性とその理論的背景について論じた。

第4章では、VHMの適用可能性について実践研究を行うことによって検討した。知的障害特別支援学校小学部に在籍するASD児を中心としてVHMを行動変容に用いた単一事例研究を行った。4事例に対して実践研究を行った結果、2事例においてVHMによる指導が児童の行動変容に対して有効に作用した一方で、残りの2事例では効果が限定的であった。この2事例に対しては他の方略を用いることによって行動改善を試み、一定の効果を導くことができた。

第5章では子どものモデル（ヒーロー）への興味の示し方と介入効果の関連について検討した。まず、第1節では、知的障害特別支援学校中学部に在籍する2名の生徒を対象として、モデルとして採用するヒーローの社会的好子としての効力とVHMの効果との関連について検討した。まず、担任教師への面接および質問紙調査によってそれぞれの生徒のヒーローを特定した。次に、任意の課題場面においてヒーローによる称賛を非随伴的に呈示し、課題遂行率の変化を測定することでヒーローの社会的好子としての機能を確かめた。その後、日常生活場面から選定された標的行動に対してVHMを実施した。その結果、どちらの生徒についてもヒーローの社会的好子としての効力が確かめられたにもかかわらず、1名の生徒にはVHMによる行動改善が観察された一方で、もう1名の生徒の行動改善は限定的であった。この結果から、ヒーローからの称賛が好子として機能するとしても、そのことが必ずしもVHMによる介入効果を予想するものではないことが示唆された。第2節では事例研究の対象となったそれぞれの児童生徒の特性と介入の効果を照らし合わせ、考察を試みた。その結果、限られた事例数からの検討ではあるものの、比較的高い効果量が得られた児童生徒では日頃から「ヒーローを模倣する姿」が観察されていたことについて述べ、このことがVHMの適用条件となる可能性について指摘した。

第6章では各章について総括し、今後の課題として、変数を可能な限り統制しつつ実践研究を蓄積し、VHMの作用機序仮説を検証していくことが必要であることを述べた。